横浜善光寺留学僧育英会の『論文集 Vol.4』

若き留学僧の真摯な情熱と理想を綴る

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、横浜市港南区日野中央一ノ一二ノ九・曹洞宗善光寺内）が仏教興隆と世界の進運に貢献する人材を育成しようと、国内外の若い仏教徒を支援しつづけて十八年になる。海外に留学僧を派遣し、また外国からの留学僧を受け入れるという育英活動で今日までに育てた留学僧は百六名、関係国はアジア欧米を含めて二十ヵ国一地域、派遣国は十四ヵ国にのぼる。留学僧たちが志願時に提出した論文は『論文集』として出版されており、ことし第四集が刊行された。

論文からは、若々しい情熱と理想に燃える留学僧たちが、二十一世紀の仏教と自分についてや、留学僧として何を学ぼうとしているのか、これからの国際社会と仏教の役割などについて真摯に問いかけ、答えようとする姿勢がストレートに伝わってくる。つい仏教の悲観的な側面に目を向けがちになる現実の中で、論文集は明日の仏教への希望を抱かせてくれる。

日本印度学仏教学会理事長の前田專學氏（東京大学名誉教授）は、序文に「若く、柔軟で、

知識欲・好奇心ともに旺盛な時代に留学することは筆者の経験からいってもきわめて大きな意味を持っております」と述べ、筑波大学名誉教授の三枝充悳氏（東方学院長）もまた、母国を離れて海外で暮らす留学体験は「その人の生涯を通じて深刻にきざみこまれ、ほぼその人の一生を決定する」とし、そのように貴重な人生の契機に奨学金を送って援助するという快挙を実行・継続している黒田理事長に満腔の敬意を捧げている。

しかし第四集の読みどころは、「法の華は人によって開く」という黒田理事長の巻頭言であり、また社団法人日本能率協会で行なった「人材育成と私の使命―道元禅師の発願利生の現代的体現―」と題する講演録であろう。そこには黒田理事長の「発願利生」の源泉となるギリギリの修業体験が赤裸々に語られている。それは仏道を求め、自己を求め、そして自己を忘れ、ついには万法に証せられていく一求道者の歩みにほかならない。

頒価二、〇〇〇円。成寿山善光寺刊。編集・印刷は中外日報社。

（平成十四年十一月十四日付の中外日報より転載）